

柳井地域領家変成作用の斜方輝石アイソグラッド反応

Reaction to define the orthopyroxene isograd of the Ryoke metamorphism in the Yana area, SW Japan

池田 剛 [1]; 平峯 綾 [1]

Takeshi Ikeda[1]; Aya Hiramine[1]

[1] 九州大・理・地球惑星

[1] Earth and Planetary Sci., Kyushu Univ

領家変成作用の最高変成度が角閃岩相でなくグラニュライト相に属することが、近年の研究によって明らかになってきた。本研究では、斜方輝石アイソグラッドを定義する反応を山口県柳井地域において明らかにした。

柳井地域の最高変成度地域は泥質岩にザクロ石と堇青石の共存がみられることで定義される（ザクロ石-堇青石帯）。この帯の変成塩基性岩にのみ斜方輝石を含む共生が産し、斜方輝石アイソグラッドは、地理的にザクロ石-堇青石帯と北側に隣接するカリ長石-堇青石帯との境界にほぼ一致する。両帯中の普通角閃石、黒雲母の組成は、鉱物共生によって変動するが、普通角閃石、黒雲母、カミングトン閃石の3相を含む共存に限ると変成度の上昇に伴い、系統的に変化する。この組成変化から、斜方輝石アイソグラッド反応を次のように求めた。

Al, Fe+Mg に富む黒雲母

+ Si, Fe+Mg に富む普通角閃石

+ イルメナイト + 石英

= Ti に富む黒雲母

+ Al, Ti に富む普通角閃石

+ 斜方輝石